

【Chapter15 言語の死～言語はどう終わるか～】

・イントロダクション

19世紀の学者たちは、言語を誕生から死までその一生を予測できる植物のような実体であると考えたが、最近では、そのような単純な考えを持つ者はいない。しかしながら、言語は時に死滅するというのは事実である。これが本章で議論する過程である。

言語の死滅について話すとき、ラテン語がフランス語やスペイン語などに外見と名称を変えたように、何世紀もかけて徐々に変化し、その名前を変える言語があるが、ここではそのような言語に言及するのではない。我々は、より激烈でなかなか起こりえない、ある言語の完全なる消滅について考える。

人間は決して話すことを辞めない。では言語はどのように死滅するのだろうか。言語が死滅するとき、人々が話し方を忘れてしまうのではなく、他の政治的、社会的に優勢な言語が徐々に古い言語を追いつくのである。このような状況において、2つのうちどちらかが起こると考えられる。1つは、古い言語が支配言語から形式や構造を徐々に取り入れ、もはや同一の言語であるとわからなくなるほどまで姿を変える「言語の自殺」、もう1つは支配言語が古い言語を抑圧し駆逐するというより激烈な「言語の殺害」である。これら2つの現象を見ていこう。

・言語の自殺

言語の自殺は普通、2つの言語がかなり類似しているときに起こる。この状況では、威信のない言語の優勢な言語からの借用が容易に起こり、それ自体が過程の中で消滅してしまう。これを代表する例にクレオール語があり、その話者に基盤言語を話すように降りかかる圧力の過程は脱クレオール化と呼ばれる。これは、他の言語変化同様、基盤の言語とクレオール語で重なる構造や音から始まり、小さな段階の連続の中で起こる。例えば時の表現は、都市形式のトク・ピジンの語彙や音のパターンに影響を与え最も浸透していると考えられる。トク・ピジンと英語の混同は、1つの文中で起こったり、会話の中で起こったりし、時にどちらの言語を話しているのか判別できないほど密接に混合されているが、それはあくまで自然なことであり、賢さや面白さを示そうとしているわけではない。クレオール語が基盤言語から借用するのは、2言語間にかなり重複があったり、クレオール語に足りない言葉や厄介な言葉を補ったりするときである。基盤言語から借用される語は最初さほど影響を持たないように見えるが、次第に影響力を強めていく。このようにして、基盤言語は全方向へと広がっていくのである。

・言語の殺害

古い言語が新しい言語に虐殺される現象である言語の殺害は、言語の自殺よりも熾烈である。最初の段階では、古い方言を話す人の数が減少し、その言語が人里離れた地方に少し残っているのが見られるだけとなる。こうした孤立した集団が社会的、経済的に役立つ言語と密接な関係を持つようになると、生存していくためには2つの言語を使用することが不可欠となる。2言語を使用する人々の第1世代は、両方の言語を流暢に話すことができるが、後に続く世代は、死につつある言語をあまり上手く話す

ことができない。その結果、古い言語は、主に高齢者によって話されるようになる。最終的には、古い言語を話す数人の話者たちは、準話者（semi-speakers）となり、流行遅れの会話をすることはできるが、物の名前を示す語を忘れ、語尾の形式を誤り、限られた文型しか用いない。こうした言語の崩壊を研究した言語学者であるドリアンは、スコットランドの北部に位置する村であるブロラ、ゴルスピー、エムボに焦点を当てた。これらの村ではゲール語が死滅しつつあり、ブロラ村とゴルスピー村にはゲール語を第1言語とする70代、80代が在住し、エムボ村には40代でもゲール語を母語とする人が見受けられる。これらのゲール語話者は2言語話者であり、多くがゲール語よりも英語を流暢に話す。彼らのほとんどは、自らの話すゲール語が、自分の両親や祖父母よりも劣っていることに気づいている。ドリアンが行った研究は、言語死滅の複雑さを示していて、古い言語の全般的な死滅の傾向は認められるが、完全に消えることはない。次の段階では、若い世代が、わずかながら散在するゲール語の語彙を認めるだけとなる。この段階においては、その言語はもう1つの社会的、経済的に優勢な言語によって殺害された、と表現されることになるだろう。

【Chapter16 進歩か衰退か～状況の見極め～】

・イントロダクション

将来に対する予想は、現在をどう理解するかによって決まる。言語変化を詳細に調べてみると、その変化は自然で避けようがなく、断続的で、とても込み入った社会言語学上、心理言語学上の要素を含むことが示された。時には変化は破壊的運動となり、以前は安定して利用されていた体系が破壊されてしまうこともある。しかし、変化が言語体系を破壊する場合であっても、人間にとって言語が変化するのは何も悪いことではない。変化が自然且つ避けられないものであることを考慮するならば、議論が必要な最後の3つの質問へとたどり着く。1つ目は、進歩と衰退を語ることは、なおも価値があるのか、という問いである。2つ目は、人間の言語における進化の方向とは、そもそも探知できるものなのか、という問いである。3つ目は、言語変化はモラルの面では悪くないとしても、社会的には好ましくないのだろうか。また、好ましくないならば、それは制御することが可能なのだろうか、という問いである。

・前進か、それとも後退か

言語は進歩するのか衰退するのか、という問いに関する意見を表明するときに、その意見を持つ人の宗教的、哲学的先入観を反映するだけになってしまう傾向があった。この半宗教的信念は完全に死滅することはなかったが、19世紀半ば以降、この見解とは正反対の第2の見解が共存するようになった。それは、適者生存というダーウィンの教理である。これは、言語の進歩と衰退といった両概念を拡張と縮小といった概念と混同しているが、拡張と縮小は政治的・社会的状況の反映であって、言語に内在する優良性や退廃を反映しているものではない。そこで、言語の進む方向の可能性を査定するためには、半宗教的信念とダーウィンの教理の両方を取り除く必要があると考えたが、これらの誤った考えから逃れたとしても、言語における「進歩」とは何を意味するのか、という問題が残る。「進歩」は何らかの好ましい結論へと向かう運動を意味するが、多くの学者は「最も単純な機構で最大量の意味を表現できる言語を最高の地位に置く」というイエスベルの見解を鵜呑みにしている。この基準に当てはめて考えると、最も進んだ言語の地位はピジンが占めることになるが、本当の単純さは多義性と取り扱いにくさによって相殺されてしまうため、単純な簡単さは必ずしも「最高の」言語を指し示すことにはならない。

ある点で簡単で規則的な言語は、他の点では複雑で、混乱をもたらす傾向があるのだ。全体的に言って、「完全な」言語といった表現が何を意味するのかについては、十分に定義することがまだできていない。ある言語の特定の部分は簡単だから、といった理由で他の言語の同じ部分よりも「優れている」とすることがせいぜい可能なのである。また、完全に規則的な言語が最良であると全ての人が同意したとしても、パターンの崩壊と回復の間で絶え間ない引き合いが起きているため、段階が進むにつれてパターンが整理されて規則的になると考えるのは誤っている。したがって、変化はまるで潮のように満ちたり引いたりするが、我々が言える限りでは変化は進歩も衰退もしないのである。

・言語は進化しているか？

進歩か衰退かは置いておいて、言語が全体として本来備わる構造の中で何か特定の方向へ動いているという証拠があるかを問う必要がある。明らかなのは、言語が何らかの方法で進化しているとしてもその進化はとてもゆっくり行われるということだ。しかし、何らかの全体の変化を特定したいと思っている人々にとっては不幸にも、世界の言語は別々の方向へ、そして多くは反対の方向へ動いているように見える。歴史的な語順の変化や音韻論でそれぞれの違いが例として挙げられる。全体としては、「言語の進化そのものは決して具体的に説明されてはおらず、全ての言語は本来平等だと主張されるべきだ」と結論付ける他ない。

・言語変化は社会的に望ましくない？

最後に言語変化は望ましくないのか、もしそうならば制御可能なのだろうか。言語変化を社会的に見るとコミュニケーションが妨害される際に望ましくないとされる。言語変化が引き起こす違いが人々の相互理解と団結を妨害する恐れがある状況にできることは、変化を制限するのではなく全ての人々が少なくとも一つの共通言語とその変種を持つことを確実にすることである。標準語を置くことは強制的には起こすことができない。自然発生的に起きることもあるが、他の場合では意識的な介入を要求する。いったん標準化が起こり人々が標準として特定の変種を受け入れれば、それは強い統一力としばしば国家のプライドの源と独立のシンボルとなる。

・偉大な許可者

「偉大な許可者」とは知性を持ち限定された人達でしばしば作家だが、明確さと正確さに注意し思考を滞らせる曖昧な表現をひどく嫌う人々を指す。彼らは良いと思う新たな用法を受け入れようとして、無駄に思える用法に反対し戦おうとする。その目的は称賛に値するが、どんなにいわゆる言語活動家が一生懸命働きかけたとしても、その潮流が逆行する可能性は低い。またそれ以上に重要なのが、どれだけ注意深く知識がある作家であっても物事の良し悪しを判断することがいかに個人的で特異なものかを理解する必要がある。人々が言語に世話を焼こうとするのは、他者の意見とは一致しないであろう個人的な保護に他ならないのだ。

・結論

とどまることを知らない言語変化は当然でありながら必然で、それは心理言語学と社会言語学の要因が組み合わさることに起因する。ひとたび宗教的、哲学的な先入観を除けば、言語が進歩しているか衰退

しているかを示す証拠はない。崩壊と治療の膠着状態、反対の引き合いは言語に必要不可欠な特徴である。さらに、構造の観点からは言語が特定の方向に動いている証拠もない。言語変化は悪いものではないが、特定の状況においては社会的に望ましくはなく、互いの理解を妨害する変化は社会的、政治的に不便をもたらさう。こうしたことが起こると標準化が推奨されるだろう。人々は話したいと思う言語や方言のみを採用しようとするので標準化は徐々に行わなければならない。言語は、言語学者が思いもよらない謎の形で発展していく可能性が常に秘める。時間とさらなる研究のみが真実を知るが、楽観ではなく我々は言語変化に根付く社会的及び心理的要因を理解しようと一步一步進んでいくのだ。

【Research】

・標準化も進む現代の中での方言の使われ方（一部）とそれが指す意味

誰もが共通語を話せる時代の方言は、共通語の中に適当に投入され心理的效果を発揮する「要素」として捉えることが妥当であり、その意味で方言はアクセサリ化していると考えられる。アクセサリ化の議論の中で、方言の現代的機能が「同一地域社会に帰属する親しい仲間同士であることの確認」と「その場の会話を気取らないくだけたものにしたいという意思表示」になりつつあることがしばしば示される。また若者がメールや SNS などエセ方言を使って楽しんでいる背景から、方言が遊び感覚で使用され「親しさ志向」で場の共有感を高めていることも分かる。実際に若者を調査すると、方言が親密感やノリを生み出し、場や関係性を醸成する機能を果たしていることが分かった。すなわち方言は若者延いては現代において雰囲気の高さや親しみ感を作り出す言語資源としても使われている。一方、そうした傾向の裏返しとしてか、若者の中で方言は地域性の強い特徴的なことば・地域文化を代表することばという意識が希薄になっていることも窺える。

【Questions】

- ・言語の進歩、あるいは衰退として考えられる現象として、具体的にどのようなものが挙げられるか。
- ・英語をはじめとする外来語は今後日本を侵食し悪影響を及ぼすだろうか。
- ・本書の結論が出た上で今一度、言語は進歩しているか衰退しているか考える。

【Reference】

小林隆（編）「コミュニケーションの方言学」ひつじ書房, 2018 年, p.319-337